

武蔵野日曜聖書講筵 年頭講筵

一旗万流

――詩篇第60篇――

1964年1月5日

小池辰雄

枯木龍吟 60歳から人生の後編 一旗万流 一つの旗とは何か キリストという旗 日章旗
白地に太陽 一幹万枝 有限の中に無限を入れ給う

【詩篇60】

ダビデ、ナハライムのアラムおよびゾバのアラムとたたかいおりしが、ヨ
アブかえりゆき塩谷しおのたににてエドム人一万二千をころしとき、教訓おしえをなさんと
てダビデがよみて「証詞あかしの百合花ゆかり」という調べにあわせて伶長うたのかみにうたわしめ
たるミクタムの歌。

1 神よなんじわれらを棄てわれらをちらし給えり。なんじは憤りたまえり。
ねがわくは再びわれらを帰したまえ。

2 なんじ国をふるわせてこれを裂きたまえり。ねがわくはその多くの隙すきをお
ぎないたまえ。そは国ゆりうごくなり。

3 なんじはその民にたえがたきことをしめし、人をよろめかする酒をわれら
に飲ましめ給えり。

4 なんじ真理まことのために挙げしめんとて、汝をおそるるものに一つの旗をあた
えたまえり。セラ

5 ねがわくは右の手をもて救いをほどこし、われらに答をなして愛いとくしたも
うものに助けをえしめたまえ。

6 神はその聖きよをもていいたまえり。われ甚いたくよろこばん、われシケムをわかち、
スコテの谷をはからん。

7 ギレアデはわがものマナセはわが有ものなり。エフライムも亦わが首こうべのまもり
なり。ユダはわが杖、

8 モアブはわが足盟あしたらいなり。エドムにはわが履くつをなげん。ペリシテよわが故に
よりて声をあげよと。

9 たれかわれを堅固なる邑まちにすすましめんや。誰かわれをみちびきてエドム
にゆきたるか。

10 神よなんじはわれらを棄てたまいにあらずや。神よなんじはわれらの軍いくさ



とともにいでゆきたまわず。

11 ねがわくは助けをわれにあたえて敵にむかわしめたまえ。人のたすけは空
しければなり。

12 われらは神によりて勇しくはたらかん。われらの敵をみたもうものは神な
ればなり。

● 枯木龍吟

私の今度の年賀状はこういう印刷をした。

「頌春。ご恵福を祈りあげます。1964年（昭和39年）」

枯木龍吟 銷して未だ乾かず。

万里の清風ただ自ずから知る。

知らず誰か入らん蒼龍の窟。

碧巖録の中から三カ所を選んで、それを一つのまとめた句に私はした。こういう連なつた文句ではない。それぞれ違った別なところに、碧巖録百則の始めと中と終わりにある。

「枯木龍吟銷して未だ乾かず」

枯れ木が風をうけて、龍が唸るように声を放っている。松籟のごとくに銷して未だ乾かず。なにか枯れて干からびたようだけれども、決して乾いていない。生命が残っている。ちょうど、60歳になってだいぶ肉体的には乾いたような私でありますけれども、まだ乾いていないというわけです。

「万里清風唯だ自ずから知る」

清らかな御霊の、天来の天津風が吹いている。それはこういった境地に入ると自ずから知れてくると。神の風が自ずから身に感じられているわけです。

「知らず誰か入らん蒼龍の窟」

「虎穴に入らずんば虎児を得ず」という言葉がありますが、虎の穴に入らなければ、大事な虎の子も得られない。そのように、この蒼龍（青龍）というのは非常に珍重されるところの珍しい龍であります。白龍とか青龍とかいう。そういう龍の窟に誰が入って、これを探らえることができるであろうか。なかなか大変なことである。ということは、またひとつはかけて、我々の幕屋は蒼龍の窟のごとき大事な福音を持っているぞという気持ちもあるんですが、そんなことは誰にもわかりません。そういう碧巖録の句を私の年頭の所感として掲げて、いろんな人に送りましたけれども、何事かと思っただかとおもいます。

● 60歳から人生の後編

私はとにかく今度は、甲辰の年に、今から60年前と同じところにめぐってまいりまして、なにも還暦なんて——今は平均年齢が男は67で、女が70位ですか——ちつとも珍しくも何



ともない。まだ平均年齢に達しないんですから。でありますけれども、私としてはとにかく兄弟中で一番ひよわい人間であつたんです。甲種合格のこの兄（政美）なんかは、徴兵にも勇ましく行つた、この人が死ぬかと思われるような人が先に逝つてしまつて、もうとくの昔に消えそうな私が一番あとに次男として残っているわけです。よくまた60までやってきたかと思う。何たびか死にそうになつた。

小さいころ、まだ学校へ行かないときに、夏の日照りの中を——親友のぼんちゃんという少年でしたが——それと二人でトンボ取りやセミ取りをして歩いていた。そうしたらば、大道にカブトムシが道を横切ろうとした。そうすると、私のその友人がそれを見つけて、カブトムシに向かって走つていった。ちょうどそこに大八車を通りまして、大八車にぶつかつて——何十俵という米俵を積んだ四輪の昔の荷馬車です——その車輪にひつかかつてしまつて首を轢かれて、またたくまに死んでしまつた。もし私が先にそれを見つけて走つたらば、私が死んだ。それが私の最初の、

「ひとその友のために生命を捨つる、これより大いなる愛はなし」

ということ、私はいつまでもその友人を忘れるわけにはまいりません。

そういう回顧話を今したらば大変でありますから、致しませんけれども。ある時は——今でもここに傷が残っていますけれども——日暮里の駅で汽車が来るかなとおもつて待つていた。プラットホームから落ちてしまつて、レールにぶつけてしまつた。私を抱き上げたら、まもなく汽車が入つてきた。そういう危機一髪のことであつた。順天堂に担ぎ込まれて、そして縫ってもらつた。今でもここが出つ張つているのがその痕です。なお、たくさんある。おそらく、指折り数えたら、かれこれ十指くらい危険なことがあつたと思います。病気で危なかつたこともありました。

とにかく、何だかしらんが、私は助けられてまいりました。もうあらゆる点において私よりか優秀であるところの一番上の兄が27歳で逝つてしまつた。私の福音の戦いの責任は、この兄のためである。

そういうようなわけでありまして、この60歳を迎えて正直、私は感慨無量であります。今そのことを回顧して語るところの人はひとりもない。

「ああ、私が生まれた年がきたか」

と、何ともいえない。それで、私の前編はこれで終わりであります。この今年から私の生涯はまさに後編にはいる。私の書斎には兄が遺していった十字架があります。こないだそれを取り出して、置きました。

これは神さまから賜つた生であり、第二のこの後編を——後編こそが私の本当の人生で、今までが序曲で、これから何年続くかしりませんが——しかし、私はもう福音第一、伝道第一をもつて突き進む覚悟であります。具体的には、4月からそれが開始しますけれども〔註：1964年3月末で東大教授を定年退職する（一高東大教授15年）、年改まつてその感まことに



新しきものがあります。

それで、今日は、この「60」というわけで、何を皆さんと学ぼうかと思ったときに、やはり60という数にぶつかりました。詩篇60篇を開いてみた。そしたら、きわめて今日学ぶのに適切な章であることに気がついた。

60という数は、また別な想い出があつて、私は中学校の入学試験のときに、受験番号が60番だった。たくさん割られる数はいいかいって、この60という数は、1、2、3、4、5、6、10、12、15、20、30で非常にたくさん割れる。

「これは入学確実だ」(笑)

なんてなことを思ったことを今でも思い出しますが。しかし、その時は実は数学を1題、完全に失敗して、もうすっかりしよけてしまつて、

「もうぼくは発表を見に行かない」

「それでも、とにかく行つておいで」

と言うから、おそろおそろ出かけていった。本当に悄悄として出かけていった。そしたら、巻紙をずっと繰り広げて、だんだん60に近くなつた。60という数が見えた時には本当にうれしかったですね。そしたら、その数学の問題ができた人はたった4人しかいなかったという。翌日は英語の試験で、英語はちよつと得意だったものですから自信があつた。

まあ、余計な話をしてすみませんが、そんなのが「60」(笑)。辰年というんですが、竜たつというのは聖書ではよくないですね、竜だの蛇だのというのはサタンの使いみたいなやつで、ところが、東洋では龍りゅうというのはわるくないので、こないだ新聞を見ていたら、インドでもやはり神格化されているそうです。中国では、麒麟きりんと鳳凰ほうおうと亀と龍が四つの霊獣だそうです。天竜という。非常に神秘性をもっているものでありますが、私は別にそう神秘的な男でもないですけども。日本では、「伏龍」という言葉もあるそうです。

●一旗万流

それでは、詩篇60篇に入ることにならう。これは、

「ダビデ、ナハラしおのたにイムのアラムおよびゾバのアラムとたたかいおりしが、ヨアブあかしがえりゆき塩谷しおのたににてエドム人一万二千をころしとき、おしえ教訓をなさんとてダビデがよみて「証詞あかしの百合花ゆかり」という調べにあわせて伶長うたのかみにうたわしめたるミクタムの歌。」

という、非常に長い詞書ことばがきが書いてある。この表題通りでいえば、サムエル後書8章あたりのところ、あるいは歴史誌略上の18章あたりのところが背景となるわけですが、これを読んでみると、必ずしもそれに当てはまらない。あのとときはむしろ、ダビデはむしろ非常に勝ったんですが、この詩篇を読んでいると、むしろ負け戦の現場と読める。そういった学問的な検討のことは今いちいち致すことはやめておきます。



「神よなんじわれらを棄てわれらをちらし給えり。なんじは憤りたまえり。ねがわくは再びわれらを帰したまえ。」

不信に対してイスラエルを棄て、散らし、そして捕囚の日々を、審判をイスラエルおよびユダヤは得たわけではありますが、それを

「我らを再び帰して、エルサレムに戻して、新しく信仰の民としてください」という祈りでありましょう。

² なんじ国をふるわせてこれを裂きたまえり。ねがわくはその多くの隙^{すき}をおぎないたまえ。そは国ゆりうごくなり。

もう少しはつきりと、新しい訳では、

「あなたは国を震わせ、これを裂かれました。その破れをいやしてください。

国が揺れ動くのです。」

と。日本のことを考えれば、1945年にいつぺん日本はたおれました。それはまさに日本の——まあ政治家が主ではありますが——傲慢な罪。

「八絃^{はつこういちう}一字」

というのは非常に素晴らしい言葉ですけれども、八絃一字の理念のもとが神さまであるならばいいですが、八絃一字の主人が日本であるような考えになると、とんでもない間違いになる。まさに一字であつて、宇内^{うだい}、神の大家族として一字である。そういう意味においては非常に素晴らしい言葉なんです、その内容が非常に地的なものになっているから、これが神の審判に遭ったわけです。

³ なんじはその民にたえがたきことをしめし、人をよろめかする酒をわれらに飲ましめ給えり。

「よろめかする酒」というのはイザヤ書51章17節にも出ておりますが、「神さまの憤りの酒」です。それからイザヤ書63章にも、

「エドムからやつてくる、酒槽^{さかぶね}を踏む者がある。その衣が酒の血のような色で

真つ赤になった」

とある。キリストの預言みたいのところ、贖罪を予表しているようなところです。これも神の憤り、審き、それから贖罪へといくんですけれども。罪を贖うということは、審判をなしにしては贖いということがないわけです。いわゆる大慈大悲ではありません。

⁴ なんじ真理のために挙げしめんとて、汝をおおるるものに一つの旗をあたえたまえり。

こここのところの新しい訳では、

「あなたはその民に耐えがたい事をさせ、人をよろめかす酒をわれらに飲ませられました。あなたは弓の前から

この「真理」という字と「弓」という字はヘブライ語ではちよつと変えると似た字だもの



ですから。

弓の前からのがれた者を再び集めようと

新しい訳はそういうことになっている。それの方がわかりやすいわけです。

あなたを恐れる者のために一つの旗を立てられました。」

今日は「一旗万流」という表題を私は掲げました。「万流」という言葉はここには出ておりませんが、私はこの「一つの旗」ということを冥想していたら、それに後に続く言葉として——ちょうど上の句に対する下の句のごとく——「万流」という言葉が与えられたわけです。どうも、四字の対句式な言い方を私は大変にしますけれども、そこに一つの真理の照応の姿がある。真理というものは両極をもっている。

「神は愛である。神は義である」

これは離すことができない。両極ではありますが、絶対に不可分である。この「一旗」だけではいけない。「万流」だけでも困る。

「二旗万流」

となって初めてその「二旗」の意味が本当に渾然として出てくる。

そこが私たちの御霊の知恵という。真理は、言葉はその奥から余韻をもつて出てくる。日本人のこころは余韻をもっている。余韻のない人になったらダメですよ。

こないだ梵鐘を、除夜の鐘を聞いた。西洋の鐘は余韻がない。それはある程度はあるでしょうけれども、余韻がないから、ガランガランと続けさまに鳴らす。東洋の方は、ゴ~~~~ンと鳴らして、あとはしばらく黙っている。虚空に余韻が流れる。「聞けない音が聞こえるか」というようなわけです。

「²この日ことばをかの日につたえ、

このよ知識をかの夜におくる。

³語らずいわずその声きこえざるに、

⁴そのひびきは全地にあまねく、

そのことばは地のはてにまでおよぶ」(詩篇19・2〜4)

「聞こえないのに、その響きが全地にあまねし」

という。人間の耳には響かなくても、魂に響くような響きです。それがこの余韻の世界です。

「古池や蛙とび込む水の音」
かわず

日本の俳句や和歌は余韻をもっている。和歌というのは一頁に二、三句しか書いてない。これは非常に贅沢です。なぜこういうように余白があるかというと、これは余韻があるからです。これをベツタリと印刷されてしまったら、和歌は死んでしまうか、暮れの人混みみたいでどうにもならん。和歌というものは少ない文字の中に響きをもっているから、余白がなければ困るんです。そういうように非常に余韻をもっている。日本の芸術は余韻の芸術、あるいは間の芸術という。そこに間がある。空間的にも時間的にも間がある。



● 一つの旗とは何か

4 なんじ真理^{まこと}のために挙げしめんとて、汝をおそるるものに一つの旗をあたえたまえり。

と。これがなかなか余韻のある句です。

5 あなたの愛される者が助けを得るために、右の手をもって勝利を与え、われらに答えてください。

「汝をおそれる者」また「あなたの愛される者」、これはもちろん同義語式に使ってある。「おそれる」という字は「ヤーラー」というしよつちゅう出てくる字です。畏^{おそ}れかしこむ「畏れる」という字です。「恐がる」ではない。「恐」ではなく「畏」の方です。「神をおそれる」という言葉は、「恐」を使つてはダメですよ、必ず「畏」の方を使う。漢字は、そういうのを制限してはダメです。これは制限漢字にあるかね。「恐」と「畏」とを一緒にされては困る。それは恐れ（脅威）だよ。かしこみ畏れる。「畏敬の念」というでしょ。カントの道徳は、

「おきてに対する畏敬の念をもつて自らこれに従つところに自由なる独立者の人格的威厳がある」

という。畏れ敬う、これがここにある「畏れる者」ということ。

5 ねがわくは右の手をもて救いをほどこし、われらに答をなして愛^{いつく}しみたまえ。

散らさないで集めて、憤らないで愛してくださいと。こういうわけです。その奥をまた逆に読まなくては。

私の聖書の読み方は図太いです、少し。そんなことは誰も註解者は言わん。

「棄てて、散らして、憤った」という。

「どうか棄てないでください。どうか集めてください。どうか愛してください」

と、そういう信頼の迫りが神さまは喜びたもう。神さまに棄てられたつて、捨て鉢になったらおしまいですよ。

「どうも、神さまは不公平なようだ。運命は私にどうも、いろんな人と比べてみると、不公平なようだ」

と。そんなことはない。人生は、運命環境いかにもあれ、その現実から突破して、霊的な現実には、本当の根源現実の中に突破する人が本当の勝利です。相対的な幸福の中に安住していたらば、いつか倒れる。これはもう凄い法則なんです。決して幸せが幸せにあらず、不幸が不幸にあらず。これは相対的現実において、移ろいゆく現実において、移ろわざるところを生きるか。我々の福音はそこにある。何か現象的に御利益を言っているのではない。そういう意味において絶対に勝利の福音であります。パウロと共に、

「一切の秘訣を得たり。牢屋に繋がれても我が魂はつながれるにあらず」



と。たくさんの艱難を突破したパウロです。まあパウロさんのことを思えば、我々の艱難なんてものは問題じゃない。大した使徒ですよ、パウロというのは。映画にも出てくるけれども、あのとときの奴隷を鞭打つ鞭なんてものは凄いものだ。48回も打たれたら、たいがいみんな参ってしまう。

とにかく、私たちの戦いはこれからこの一つの旗が立てられた。いかなる旗であるか。まずそのことから考えていくかな。いったいどういう旗でしようかね。

さつき歌った讚美歌「北のはてなる」(214)の標題に「伝道」と書いてある。みんな、伝道という言葉を案外いい加減に考えている。私はバカみたいだけれども、何でもないところでグツと真理をつかむ秘訣をえている。言葉というものは妙なものでね、なれっこになつてしまっている。

「ああ伝道か」

と。「伝教」と言わない。キリスト教の伝教とはいわない。「伝道」といつている。だから、私は毎回言っている、

「キリスト教ではない。キリスト道だ」

と。私はこの四月に伝道に出ていったら、

「これはキリスト教ではないよ、キリスト道だ」

と言つてやりましょう。みんな、「キリスト教」だと思つてやつて来るからね。私は人を躓かせたくはない。なるたけみんなに分かりやすく言う。けれども、真理は水をわらない。真理は、キリストは水を割らなかつた。激しい時には激しく言います。

道はみな実存的に踏むところのものであつて、考えるところではない。思うところではない。一人びとりが歩いて、身に親しく、足を傷だらけにでもして登つて行く、岩がねの道である。キリスト道ということ。

およそ日本人は、東洋的な思维と在り方をもつてこの聖書にぶつかれ。今や西欧神学や西欧的な註解——それを決して私はただないがしろにするわけではない——それにいつまでも固持していて何であるかと。日本人は極東の太平洋の真ん中に——真ん中でもないけれども——島国として大洋を自分の池としていだいであるような大国ではないか。太平洋以上の大海をどの国がもっているか——まあアメリカの西側はそうかもしれないけれども——とにかく、もうすこし日本人は氣宇を雄大にしなくてはいいかん。

それは虚心坦懷に聞く人には響きますよ。私は何も大言壮語しているのではない。本当のことを言っている。およそ人間というものは、本ものにぶつかつたら、それは動くんです。たとえば、ロダンの芸術をみると、ロダンというやつとはとにかく真実を愛した。飾り物はいかん。人間のあるがままの一切をそこに掘り出そうという、そこにロダンの芸術の生命がある。整った何か美化された芸術はダメ。文学もそうです——あまり形容詞たっぷりのものはダメ——率直なものがいい。ゲーテもダンテもあの最高の詩人というものは、その



表現が非常に端的でしかも深い。そういう意味においては、「まこと」ということは全存在的ということ、全生命的ということです。

それで皆さんも、集会もそういう気魄でもって臨んでいらつしやる。何がどうなっても、我々はこの集会ごとに前進また前進だという気魄でこそいらつしやる。万難を排してやって来る。すこしくらい頭が痛くても、ここへ来ればそれですつ飛んでいってしまふ。

「今日はちよつと何々だから」

といって理由をつけて来ないのはダメですよ。故障があつたら、その故障を突破すべく、集会にやって来なくては。それに来るのに無理があつてはいかん。無理というのは、気分的に無理があつてはいかん。

「気分的に無理」

ということとは負けなんだ、「にもかかわらず」という気魄ができたら必ず勝つ。それは望みの、求めの、その足の踏み出しで決まる。人間は霊的なものですよ。冗談じゃないですよ、本当に。皆さんの生命の根源は、何ものもこれを探り出すことのできないところの、

「ディング・アンズィヒ」(Ding an sich)「ものそれ自体」

なんだ。生命それ自体。アトム、分割せられざるところの何ものかなんだ。

●キリストという旗

そういう旗。旗は何であるか。さあ皆さん、冥想してください、この旗とは何であるか。なぜ、私は「一旗万流」と書いたか。

非常におもしろいところがある。こういうところは聖書の註解書の引照にも出てこない。これは私が靈感で示されたところだ。ダニエル書7章10節のところ、

「¹⁰而して彼の^{はべ}前より^{ひとすじ}一道の火の流れわきいづ。彼に仕うる者は千々、彼の前に^{さばき}侍る者は万々、審判すなわち始まりて書を開けり。」

と。ダニエル書の黙示です。9節から、

「⁹我観つつありしに遂に宝座を^{おきなら}置列ぶるありて、日の老たる者座を占めたりしが、その衣は雪のごとくに白く、その髪毛は^{はのお}漂潔めたる羊の毛のごとし。又その宝座は火の^{ほのお}焰にしてその車輪は燃ゆる火なり。^{くるま}而して彼の^{ひとすじ}前より一道の火の流れわきいづ。云々」

一筋の火が流れ湧き出で、千々万々という。ここから私は「万流」という言葉をここに付けたんです。

「二つの旗印で行きましょう」

と言うと、とかく主義主張になる。しかしながら、私たちは一つの旗印で行く。旗幟^{きし}鮮明である。キリストの混じり気ないところの、水を割らざるところの、原始の福音である。カトリックでもプロテスタントでもない。もちろん、私はカトリックとプロテスタントの



伝統を重んじない者ではない。けれども、真にその源流に戻らなければ、本当の意味において歴史を生かすことにはならない。この旗印は旗幟鮮明で一筋に——源氏のあの幟^{のぼり}みたいなやつで旗幟^{きし}という——旗幟は鮮明なりということ。

「旗」ということで、あなた方が想いださなければならぬところがある。どこですか。多分、その引照のある聖書には出ているはずで。何と書いてありますか。出エジプト記17章15節です。

さあ、年が改まってから、皆さん、聖書を読み始める志をまた新しくしてくださいよ。元日から私も読み始めた。5章ずつくらい。

出エジプト記17章15節に何とありますか。ここところは面白いところで、8節から、

「8時にアマレクきたりてイスラエルとレピデムに戦う。9モーセ、ヨシユアに言いけるは我等のために人を擇^{えら}み出てアマレクと戦え、明日我神の杖を手にとりて岡^{いただき}の嶺に立てん。10ヨシユアすなわちモーセの己に言いしごとくに為しアマレクと戦う。モーセ、アロンおよびホルは岡の嶺に登りしが、11モーセ手を挙げおればイスラエル勝ち、手を垂^{たる}ればアマレク勝てり。12然るにモーセの手重くなりたればアロンとホル石をとりてモーセの下におきてその上に坐せしめ、一人は此方^{こなた}一人は彼方^{かなた}にありてモーセの手を支えたりしかば、その手日の没^{いり}まで垂^{さがら}下ざりき。13是においてヨシユア刃をもてアマレクとその民を敗れり。14エホバ、モーセに言いたまいけるは、之を書に筆^{しる}して記念となしヨシユアの耳にこれをいれよ。我必ずアマレクの名を塗抹^{けしきり}て天下にこれを誌^{おぼ}ゆること无^ならしめんと。15斯てモーセ一座の壇^{ひとつ}を築きその名をエホバニシ(エホバ吾^{わが}旗)と称^いう。16モーセ云いけらくエホバの宝位にむかいて手を挙げることあり。エホバ世々アマレクと戦いたまわん。」(出エジプト17・8
16)

もともと、旗は「ネース」という字です。「わが旗」というときは、「ニツシー」という。

「エホバ・ニツシー」

「エホバはわが旗」

と。しかし、この詩篇では「ネース」という原形そのまま出てくる。旗(ネース)を一つと。その旗に何が書いてあるか。「エホバわが旗」でしょ。旗即ちエホバ。もし書くならば、そこに「ヤーヴェー」と書いたらわかる。この旗には「ヤーヴェー」と書いてある。

しかし、見ゆる旗が今度は、見えざる旗になる。この旗は即ち「ヤーヴェー」という旗。我々にとりましては、「キリスト」という旗です。キリストという、見えざるころの本ものの旗です——はたと分かつたかな——そのキリストというこの旗。これが私たちの「二旗」である。「二旗」とは何ぞや。キリストという旗である。それは十字架であり、復活の光であり、聖霊の旗。復活の泉のごとき生命であり、また聖霊の鳩のごとき光である。これが



即ち「一旗」の内容です。

●日章旗

それをもうすこし具体化して形に表せば、どういうことになるか。日本の国旗であります。日本人は、世界に一番素晴らしい国旗を持ちながら、なぜその自覚をしないか。富士山はみんな知っているよ、日本という富士山。しかしながら、この日章旗という旭日の旗、太陽、これを忘れてはこまる。外国の人はこの太陽の国旗を、おそらく本当の人だったら羨ましく思うだろうとおもう。原子核的なもの凄い火が——そのダニエル書に何と書いてあるか——千々万々と火の流れが球形に球体的に、円ばかりでない、球形に展開するものが一番本ものなんです。我々の福音は四角ではない。これは球形なんだ。円現という。私はこの仏教の言葉の「円現」という言葉が大好きだ。

「到達せられざるところのものがここに円現となる」

と、ゲーテが『ファウスト』の一番あとの方で書いてある。あそこは私は「円現」と訳した。円形に現ずる。これが本当の在り方です。火であり、光であり、愛であり、熱であり、生命である。「義の太陽」と、キリストのことをそう言われているように、太陽はキリストを示している。なにも日神を拝むのではない。これはひとつの徴ですから。

●白地に太陽

大事なのは、旗の布が白地であること。青くも何ともない。旗地が白地である。そのことは私は曠愛文庫の中にも書いた(曠愛文庫第5号「太虚遍照」。著作集第6巻『随想集』66頁／第一部「福音の冥想」／八「太虚遍照」に転載)。これが無の世界、無色透明の世界。白地とは無色という、色がない。無色の透明の世界に、陽が本当に光る。いや実に陽が光れば、無色透明にされていく。私たちは決して無色なものではない。しょうがないものです。けれども、我々の中にキリストという御霊が、キリストというこの旭日が旗の中心となってくるならば、我々のこの中は白地にされていく。日に日に白地にされていく。これが救いです。

「義とせられ、聖化される」

というのがそのことです。栄光に栄化され、聖化されるということがそのこと。栄化、聖化という。

それでは何か冷たいようだね、空なようだね。決して然らず。この中には無限の色が入っている。この白地のところに何か物をもつてくると、その物が現象して、あるいは白い花となり、あるいは赤い実となる。南天みたいに。何でもその白地の世界に生ずるんです。何となれば、太陽の光がここに浸透しているからです。太陽の光が浸透していないような、キリストの光が浸透していないような、そんな空無の、妙な悟り澄ましたようなものはダメですよ。もの凄いこのキリストの光が、生命がわたっているところのものは、この中に



何かくると、そいつが光を放って、いろいろなそれぞれの現象を始める。現象せしめるところの元だよ、現象の元だ、この白地というのは。どうですか。日本の国旗というのは、驚くべき真理をそこに持っている。

こないだ、市川君がアメリカに行ってきた、

「アメリカの合衆国は種々雑多だけれども、彼らはあの星条旗を翻して、本当に星条旗に対しての尊敬と誇りを持っている。そこに彼らの「ユナイテッドステイツ」

（合衆国）の「ユナイテッド」の気持がああ星条旗を見るとときにヒタリとくる。みんな非常に国旗に対しては、星条旗に対しては、畏敬の念をもつてこれを見ている。

尊重している。もつと日本人は国旗を尊重しなくてはいいかではないか」

と、彼が言った。その通りです。ただいわゆる国粹的に、「ワッショイ、ワッショイ」と日章旗を掲げているのではない。新しい自覚でこの日章旗を掲げて大いにいい。大いに翻している。ただし、それはいわゆる昔の国威宣揚なんてことではない。国威宣揚ではない。真理の宣揚です。世界に、日本が賜った真理の宣揚として、この国旗を自覚するならば、これは本ものです。

皆さん、ものを見なおしてくださいよ、すべて。これは福音がかくさせる。キリストの福音がかくさせる。どうか、すべてのことにおいて活眼活耳をもつて、これを見、これを聴き、これを創造する。あなた方一人ひとりがみな創造者のひとりです。

●一幹万枝

この詩篇の終わりの方にも書いてある。

「¹²われらは神によりて勇しくはたらかん。」

とは何か。我々は神によって、キリストという旗をうちに宿すことによって、うちに翻すことによって、勇ましく展開していく。ゲートは、

「人生の目的は行為^{タート}、ヴォールタート、人を幸いにするところの行為である」

と言った。私たちも、何か大言壮語したり、空約束するのではない。実行をもつてする。ゲートはさすがに、ヨハネ伝一章の

「初めに言^{ことば}あり」

を大胆に、

「初めに行^{こと}あり」

と訳した。どうか皆さん、それだけの真理に対する熱情を持ってください。そして、そこに生きなければつまらんよ、人生は。一回しかない人生です。この信仰を二十歳代に賜ってボヤボヤしていたら承知しないよ。そういうわけです。

そういうこの「一旗」は、キリストという原始の福音のキリスト道であり、御霊のバプテスマを受けたところの皆さんは一つならざるをえない、この「一旗」なんです。それが「万



「流」となって皆さんの中に現象していくわけだ。この「流」は旗の流れのことです。ヒラヒラとはためく旗の流れのこと。一人びとりが即ちキリストの旗となるときに、その一つが一流となる、それが万流となる。

幕屋が本当に展開するとは分裂することではない。ただ一つのこの旗印の――一丸というなら、本当に一丸だ――それは自由にみなその働きをそれぞれのところでなして欲しい。しかし、それはバラバラであつてはならない。これはこのキリストの、私たちが賜りたるこの旗印のもとにおいて本当に――前に私は「終末的帰一」(1959年8月9日、浅間高原での第6回 夏期福音特別集会の最終講筵。著作集第4巻『詩篇珠玉集』／「終末的帰一」に転載)ということと言ったけれども――一に帰するところのもの。帰一、していないところの万流なんてものは分裂であつて、力がなくなつて、それは終いには消えてしまう。帰一するところのものがちゃんとみんなが持つていなくては。集会や団体が大きくなると、何のなんのいろいろな問題が起きますよ。ダメですよ、そんなことでは。とかく陰口を言ったり、いろんなことになる。どうか、皆さんは御霊の子らである。本当の帰一というところにおいて万流の展開をしていく。そしてそれはや垣根を知らず。

イザヤ書にも書いてある。

「汝らの幕屋の杭を^くい^いと^うに^て伸ばせ」

と。また、葡萄の樹に^{たと}譬えて、

「この葡萄の樹^きは地のはてまでもその枝を伸ばしていく」

という。

「我は葡萄の樹、汝らは枝なり」

というのがそのことです。これがやはり一旗万流の姿が「我は葡萄の樹、汝らは枝なり」という姿なんです。一幹万枝という。一つの幹に万の枝という――そんな言葉はないけれども、どんどん出来てしまう――キリストがまさにこの一幹万枝の人である。

そういう線の太さと、そして平安というものは、この御霊がこなければ出ない。いわゆる信仰で、そしてまだ頭でそういったことをただ述べているくらいなことではダメです。御霊がきていると、その平安がくる。もし分裂がきたら、そいつを全部荷いあげるだけの力を持つていなければダメ。いいですか。全部それを包括し、それを抱き止めてしまうだけの力を持つていなくては。それだけの力を聖霊は与えたもう。私はこの「聖霊」と言う時は、本当にそれだけの重さをもつて言うんです。いわゆる聖霊現象をいつているのではない。

これが、私はうれしくてたまらない。この一旗万流の姿に私たちがなっていく。

●有限の中に無限を入れ給う

5 あなたのお愛される者が助けを得るために、右の手をもつて勝利を与え、われらに答えてください。



「右の手をもって」というのは、神の力を表す。

6 神はその聖所で言われた、

その聖所で約束された、大丈夫だぞと。

「わたしは大いなる喜びをもってシケムを分かち、スコテの谷を分かち与えよう。」

今度は具体的に地名が出ているのは珍しい詩篇ですね。普通、具体的な地名はなかなか出てこない。シケムはヨルダン側の西の方の支流の所にある。スコテは東の方の支流の所にある地名です。

7 ギレアデはわたしのもの、

これもヨルダンの東の方、相当の地域です。

マナセもわたしのものである。

マナセはギレアデの北の方で、ガリラヤの東の方。

エフライムはわたしかぶと、ユダはわたしのつえである。

エフライムはイスラエルのこと。杖は王錫のことおうしゃくで權威を表す。スケプターという。兜は

勝利と權威の象徴です。

8 モアブはわたしの足だらいい、エドムにはわたしのくつを投げる。

モアブ、エドムというのは死海の東、南の方にあります。みんな近隣の別な民族——同じセム民族ですが——敵にあたるやつをみんなのつけてきた。

ペリシテについては、かちどきをあげる」と。

ペリシテは仇敵ですから。もうひとつ前にモーセのときにアマレクというのがいた。ということは、何を神さまは約束しているかというところ、その支流によってイスラエルが痛めつけられてやつつけられたのだが、逆に今度はそれをみんな統合して、そして汝の民の中に入れてしまうぞと。これが即ち、今言ったこの一旗万流の姿の約束であります。ここは旧約だから、なるほど戦争のことでしょう。けれども、私たちにおいては、福音の中にみなそれ取り入れていこうということです。

10 神よ、あなたはわれらを捨てられたではありませんか。神よ、あなたはわれらの軍勢と共に出て行かれません。

ちよつとこの所は、学者がいうように、この詩がちよつと分裂してやしないかという。昔のことを——もし始めから一つの詩であるとするならば——想いだして言ったようなことではないかという。

11 われらに助けを与えて、あだにむかわせてください。人の助けはむなしのです。

あなたが助けであって、

12 われらは神によって勇ましく働きます。われらのあだを踏みにじる者は神



だからです。

これは旧約の世界だから、「あだを踏みにじる」という。新約ならば、もし仇があるなら、それはサタンです。サタンは撃退していいけれども、「サタンよ、退け！」でいいけれども、人間を仇と思っ**て**はいかん。サタンを撃退して、どんな人をも、敵をも愛する**という**んですから。どんな人をも救いあげ**る**ということが、我々の祈りとしてはそう**な**ってくるわけです。アッシリヤもバビロニアもエジプトも、すべてこれ神の民とな**つて**祝福される**という**ことがイザヤ書に書いてある。あれが終末的**帰一**の姿です。

福音は地のはてまでも世の末までも、そのようにして一旗万流のすがたをも**つて**進んでまいります。どうか、私たち、群は小なりといえども、気宇は実**に**——質的にはですよ——質的には実に雄大なものを皆さんが自覚しなければダメです**よ**。器は、小池なん**て**ものは小なものだけれども、この小さい器の中に驚くべきものが入るから仕方がない。私はパウロのまねをするのでもヨハネのまねをするのでもない。

神さまは、無きが如き者、しようがないような者、そ**いつ**を捕まえてその中に、有限の中に無限を入れ給う**という**不思議なことがある。皆さん一人ひとりが**そう**であります。そして、これが相連**な**つていく。

これが私がこの詩篇60篇において示された内容です。この神によ**つて**働くとは、ただ労働する**という**ことではない。作用していくことです。神の力が我々を通して体現し作用していくことです。そういう意味において、この一年間は本**当**に神の働きとな**つて**進んでいく。その神の力とは何か。愛の力です。生命の力です。ゲートの『ファウスト』でも**つて**、

「努力精進する者はついに、我らはこれを救**つ**」

と書いてある。努力精進する者がた**だ**その精進の故に救われるのではない。我々が努力精進の奥に、原動力として既にこの努力精進せしめるところの力を**い**た**だ****い**ている。これが

「上からくるところの諸力」

とゲートが言**つて**いるところの、上からくるところの力である。その力は何か**という**と、愛の力である。そのことも書いてある。

神に愛され、皆さん、祈るときに本**当**に親しく神のふところ、キリストのふところに入**つて**祈りなさい**よ**。遠くで祈**つて**いたらダメです**よ**。幼児が母に**い**だ**か**れるごとく、親しくその中に自分を全託する。全託するとは、何かとりす**ま**した**こと**ではない。そして、

「汝の御意をみ力と共に下**さ**い」

と。そこに聖意体現**という**ことが起きてくる。どうか、そういう意味で、この一年間を、一年即ち一生のつもりで迎**え**たいのであります。

